

# 飲水思源

いんすいしげん

町長

松岡市郎

## 過密から適疎へ

最近、にわかに「適疎（てきそ）」という言葉が目につく。適疎の元祖は東川町だ」という人がいるが、この言葉は今からおよそ半世紀ほど前、記憶では東京大学の教授（？）が出版した「過疎と過密」の問題を取り上げた本の中に出ていたものである。従って、出自は某氏（名前と本の題名は忘れてしまった）の書かれたもので、岩波新書150円だけはしっかりと覚えていた。

日本経済の進展に伴って、農村社会から中学校卒業生がどんどんと都市へ流れて行き、農村人口が急激に減少し、過疎と過密の格差が生じて早くも半世紀になる。今回はコロナ禍もあり、「密」から「疎」への見直しと動きが顕著になってきている。適疎な均衡ある社会の必要性の提起がなされてから、ようやくという感もある。がしかし「過疎でも過密でもない適疎」が論じられることは、未来へ向かっての新しい生活への第1歩と考え、地域の特性を最大限に発揮できる「地方創生」が定着して行くものと期待が高まる。適

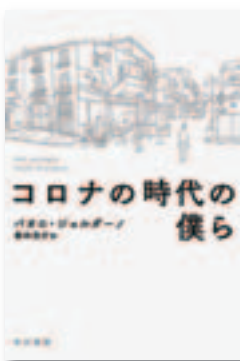
疎という言葉をよくの人々が使えば使うほど、ネットでの検索が増え、東川町という名前へ辿り着き、東川町のPRに大きく貢献することになる。どんな「適疎」という言葉を使ってほしい。（笑）

「おいしい水 うまい空気 豊かな大地」が自慢の「適疎な町」東川町。先人から引き継がれた豊かな大地には、農業、木工クラフトなどの製造業、そして観光サービス業がバランスよく構成されている。困った時にはお互いに対話を重ね、相互に補完し合い、より良い繁栄を共に目指している。

多くの農村自治体が地域にあった「疎」を生かし、適疎と言われる理想郷づくりに尽力されることだろう。重要なことは自治体の執行機関と議決機関の方向性の共有と「決断と実行」、そしてスピード感である。東川町が適疎な状況を維持できているのは先人の決断力と執行力を引き継いできているからである。今、「適疎な町」東川町のキーワードは「子育て教育」、「世代間共生」、「経済循環」ではないだろうか。

## コロナの時代の僕ら（一般書）

パオロ・ジオルダーノ／著 早川書房／刊



新型コロナウイルスの感染が広がり、死者が急激に増えていった2月から3月のイタリア・ローマ。この災いに立ち向かうために、僕らは何をするべきだったのだろう。何をすべきではなかったのだろう。そしてこれから、何をしたらよいのだろう。物理学博士号をもつイタリア人作家による、1カ月余りの日々の思索をつづった痛切で誠実なエッセー集。

## 貸し出し図書 ビデオ紹介

### せんとぴゅあII ほんの森

#### 【貸し出し】

図書、紙芝居、雑誌は一人合計20点まで(15日間)  
DVDは一人2本まで(8日間)

★本、DVDの蔵書リクエストもお受けしています



## 技 Hands and Hearts vol.3 (DVD)

販売元: アイヌ民族文化財団



長い歴史の中で独自の特色を生み出してきたアイヌ文化。現在に受け継がれてきた伝統を踏まえつつ、独創性あふれる作品を生み出すことで若手の文化伝承者に影響を与えている人や、自由な発想でアイヌ文化の多様性を表現し、新たなアイヌ文化の創造に取り組んでいる人たちがいます。工芸品などの制作活動を通して、今を生きるアイヌの人たちを紹介。(60分)

## きみひろくん(児童書)

いとう みく／著 くもん出版／刊



むかひのアパートに住むきみひろくんは、スポーツも勉強もできる優等生。でもきみひろくんは、ぼくにだけうそをつく。だれも傷つけないし、ちょっと笑っちゃうようなうそだから、ぼくはいちいち、指摘なんかしなかったけれど、ある日突然「ぼくのお母さん、本当のお母さんじゃないんだ」という、本当なのか、うそなのか、ちょっとわからないことを言いだした。